



大すき汐入

7月号

生きる力の糧

校長 小黒 裕子

連日メディアで、サッカーワールドカップについて真っ先に取り上げているのはやはりゴールシーンです。私はサッカーには詳しくないですが、ゴールに至るまでの一連のボール奪取、ドリブル、パス回しも見たくなるし、選手の努力や練習の過程、周りの人の支えがどれだけ素晴らしいものかをたどっていくことも楽しんでいます。

さて、学校では、今、そしてこれから他者と豊かに生きていくための経験がたくさん得られます。その積み重ねを大切にしてほしいと思っています。いくつか紹介します。

夏前の学校プールには、ヤゴが今年もたくさんいて、2年生が教室で育てるようになりました。根気よく待ちます。ある日、飛び回っているトンボが育てているヤゴだったと気づくと大興奮だったようです。後から教室に入った私に、「校長先生、トンボが生まれたよ。」「エアコンの後ろ、見て、見て。」と教えてくれました。下校時には、中庭からトンボを放つときは大きな歓声が上がり、その行方をしばらく見つめていました。捕まえたトンボとは全く違う感動を味わっていました。

本校は1年生と6年生の教室が隣り合っています。4月から6年生が1年生に朝の支度や給食の牛乳パックの開き方、掃除の仕方などすぐに教えにいったり見守ったりできる環境です。先日、日頃お世話になっている1年生は6年生のために修学旅行に持っていくお守りをつくって手渡しました。1年生が教室に戻った後、6年生は、お守りを机の上に置いている子、じっと眺めている子、しまうのをやめてまだ手に持っている子など、嬉しさがじんわりと伝わってきました。

教員は年に数回、外部から講師をお呼びして授業を伴う研修会や研究会を行って学んでいます。6月には個別支援学級の授業を伴う研修がありました。講師が帰られる時、参観をしていただいた子どもが校門にいました。その先生は誰なのか分からないという様子だったので私が説明をすると、手を振ってお送りすることができました。先生が歩道橋の階段を上るときも、バス停に着くまでの間、何度も何度も「バイバーイ。」と大きく手を振ってあいさつをしていました。先生も手を振り、応えてくださいました。心が通い合う短くても濃い時間でした。

このように直接体験や自然や人とのつながりは一人ひとりの子どもたちの学校生活の中に日々たくさんあります。困難や失敗ももちろんあります。大人たちはどんな声を掛けたら、どんな工夫をしたら生きる力の糧につながるのか、考えていきたいですね。